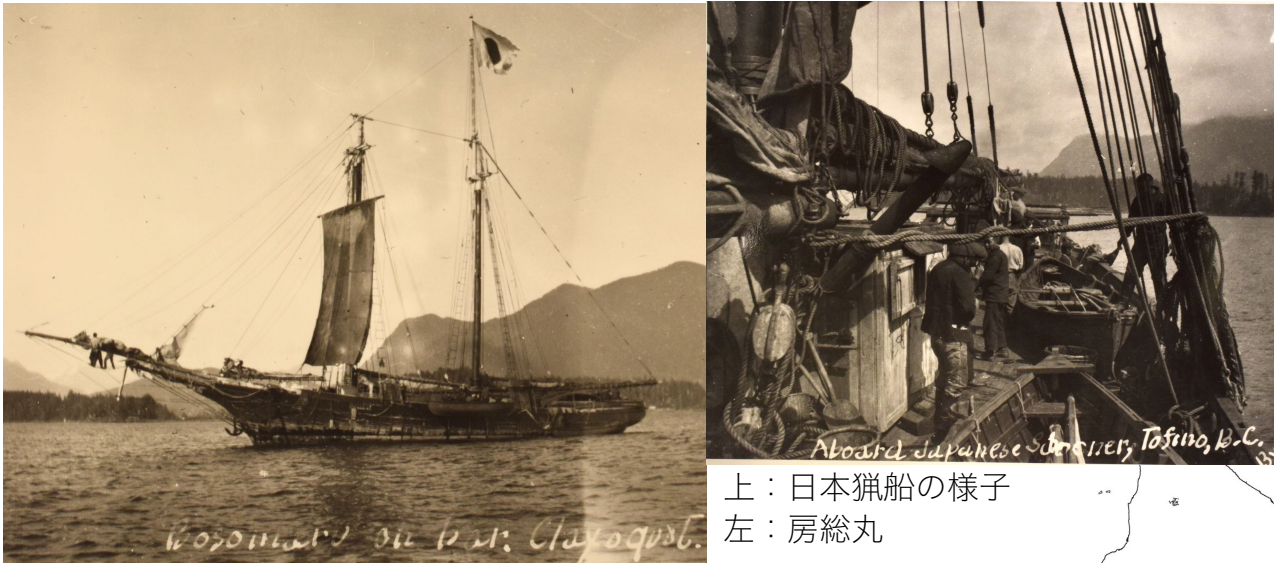


宇仁義和（東京農業大学）

Yoshikazu UNI (Tokyo University of Agriculture) unisan@m5.dion.ne.jp

明治期の遠洋オットセイ猟業は遠洋漁業奨励法の成功事例であり、洋式帆船の導入は開拓精神旺盛な地方実業家が成し遂げた目に見える近代化であった。この漁業は一般には「ラッコ船」として知られ冒険物語として認識される一方、日本猟船に対する海外の視線は厳しく、その後の国際社会における日本の姿を先取りするものであった。農商務省の統計や報告書は存在するが個別の記録は地方史のなかにあり、事実の積み重ねから全体像を描く試みは少ない。

国内の地方所在の記録と海外資料から遠洋オットセイ猟業を資料的に裏付けするとともに、個別事例によって猟業の具体像を紹介する。



カナダのバンクーバー島 Clayoquot 1900年代初頭
Clarence Wilbert Austin Drader 撮影 BCArchives 蔵

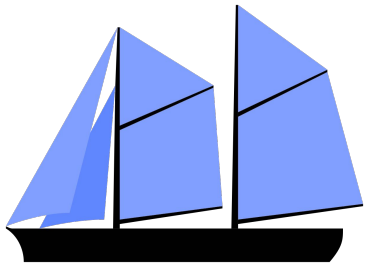
1890年代の英米猟船に対する日本側の認識と同様に、北米での日本猟船は現地での評判は悪かった。1907年頃のベーリング海での日本のオットセイ猟船について、元英領カナダ猟船乗組員によると、条約で禁止された沿岸3海里以内で捕獲はする、猟場を知るために他国の猟船の後をつけてくる、という状態だったという。1962年にCVCテレビで放送された番組のためのインタビューより BCArchives蔵



オットセイ猟業はラッコとオットセイの両種の捕獲免許を持ち、スクーナー型の帆船で操業し、ラッコ船が通名であった。当時の日本では最も遠方まで出漁した漁船であり、その冒険譚はと小説の素材となり随筆に取り上げられ、地域の学校では誇り高い郷土史の教材となった。ラッコ船の名前は現在でも用いられ、オットセイの毛皮をラッコと信じられることもあった。



「ラッコの毛皮」として保存されてきたオットセイ毛皮（石巻市）



左：射手に外国人の名前が見える和歌山県補習教育委託研究「熊野遠洋猟業誌 付：ラッコ・サイバー 太地水産専修学校 1932
中：スクーター型の帆船（2本マストに縦帆）Casito, en.wikipedia.org
右：オットセイ猟業を素材にした小説。野村愛正 1943 戸川幸夫 1971

年代	世界	日本	オットセイ猟業の状況
1867	アメリカがロシアからアラスカを購入		
1869		開拓史設置	領海での海獣禁漁（官営ラッコ猟開始）
1884		太政官布告16号	日本の猟業は特許制に
1891	英米仮条約締結		両国でオットセイ猟禁止
1893	英露条約締結		ロシアでの海獣猟規制始まる
1895		獵虎盟牒獸獵法の施行	日本で猟業が免許制に
1897	遠洋漁業奨励法の公布施行		日本獵船の日本海や北洋での捕獲が本格化
	ベーリング海から北米西海岸へ日本獵船が出獵、オットセイ猟業の操業期間		
1911		盟牒獸保護条約の締結	北緯30度以北の海上捕獲が全面禁止

本論の期間

1912	狢虎膾膾獸狢獲取締法の施行	日本の国内での取締法の整備
1940	膾膾獸保護条約を破棄	
1941	膾膾獸保護条約の失効	日本海獸による千島での海上捕獲再開
1945	終戦	すべての遠洋漁業の停止
		密漁が横行
		GHQの指導の下で調査捕獲の実施
1954	北海道で狢船の一斉摘発	海上捕獲の終了、狢船はイルカ突棒漁業に転業
1957	北太平洋のおっとせいの保存に関する暫定条約の締結	
		国際共同調査の実施

遠洋漁業奨励法の補助を受けたオットセイ猟業事業者は北海道、岩手、宮城、千葉、東京、三重、和歌山などに点在し、現在の感覚では不便な場所にむしろ多い。明治時代中期の地方には起業家精神に富んだ実業家が多くいたことを示唆している。

乗組員は全国各地から募集され、射手には外国人も含まれていた（左下資料写真参照）。遭難や拿捕が相次ぎ、新聞種となったほか記念碑の建立も見られる。現存する実物資料は塩釜の開成丸の遺品のみである。

他方、函館の事業者によると、収支が赤字すれすれなのは補助金を得るための細工であり、実際の猟業は利益の大きなものだったという。「家業の海運と漁業の思い出話」小川弥四郎 1965『函館郷土史研究会講演第4集』（函館中央図書館蔵）



左上および中：沈没場所にある開成丸の碑と碇
 右上：シトカ歴史博物館に展示中の開成丸の遺品
 アラスカ州シトカ 2019

左下：開成丸の遺品
 塩金市立図書館蔵
 右下：オットセイ猟船
 順天丸の遭難記念碑
 朝鮮海で遭難とある
 千葉県館山市

「遭難」最近順天丸の遭難を巡る歴史を
 禁止中のオットセイの捕り方
 猟船が出たというところから
 にかな内領の遭難でうなづ
 日野部田戸居人達の州知事

本州船
 大街りに
 暗

終戦後はGHQの調査の名目で海上捕獲が再開された一方、密猟が黙認状態であった。が、北海道の南部の森町で一斉摘発がおこなわれ、日本のオットセイ猟は終了した。 北海道新聞 1954.6.20

[illegible]